

DISCUSSION MEETING



先生方による座談会

デジタル地図帳の 魅力と可能性を語る。

MR. MURAI



北陸学院大学
村井 万寿夫教授

MR. UCHIKAWA



成蹊小学校 教頭
内川 健先生

MR. KOIKE



東京学芸大学附属
小金井小学校
小池 翔太先生

MR. AKIYAMA



成城学園初等学校
秋山 貴俊先生



小学校3年生で、子どもたちが初めて出会う地図帳。
紙とデジタル双方の魅力に触れ、楽しみながら学んでいくことで、
それはやがて高校へ、社会へとつながる力を育むツールとなる！
地図帳を活用した授業実践経験の豊富な先生方による座談会です。

小学校3年生から 地図帳で学ぶ意義



村井先生 本日は、小学校で地図帳を使う意義とは何か、どう活用すればよいかということをテーマに、**社会科教育の現場で活躍されている先生方**にお集まりいただきました。まず、3年生から地図帳を使う意義について、皆さんどうお考えですか。

内川先生 今の学習指導要領では、**社会科学習は地図読解中心**となっています。そこで、学校現場では、地図からいかに情報を得て、分析し、読み取って、考えていくかということを育成していかなければいけない。そして、3年生から始まる「社会」の学習は、**高校まで見据えたもの**でなくてはならない。急に地図を読むというのはやはり難しいことなので、簡単なところからだんだん見慣れていって、そして読めるようになっていく。そうしたステップが必要なので、3年生から使っていくという意義はすごく大きいと思います。

秋山先生 3年生から「社会」が始まるなかで、地図帳は、**社会科で学ぶ時に必ず必要なもの**という意識付けが、すごく大切だと思います。地図帳に入っているのは、地図だけではなくて、地図の読み方や子どもたちが興味を持つようないろいろな資料も入っているので、教科書と一緒に手に取り、開いていく。そんな形で、資料の一つとして地図帳をうまく活用していく、そのきっかけづくりを行えるのが3年生だと思います。

子どもたちに地図帳を開かせる 最初のきっかけ



村井先生 3年生になって「社会」の教科書と地図帳を

もらう。そのときに子どもたちと地図帳のよい出会わせ方について、全国の先生方にヒントとなるようなご経験やアイデアはありますか。

内川先生 今の地図帳は、子どもたちが自分から「やってみたい!」となるような要素がいっぱいあります。例えば、「**地図マスターへの道**」→p.14 という、読んでいると解きたくなるような問題がいくつも載っています。子どもたちに見せると、興味を持って、自分で学んでいく。そのように地図帳でできることを伝えることが、導入では大事ななだと思います。

秋山先生 インターネットの地図が普及して、最近では地図があるという家庭もあまりないので、3年生でもらう地図帳に、子どもたちは結構興味津々なんですよ。地形も含めさまざまな情報が載っている地図帳は、インターネットの地図とはやはり違うので、パッと見て興味を持つ。そして、「**自分のいる地域はどこなんだろう?**」というところから興味・関心が始まると思うんです。そこで、みんなで自分の地域の地図を見つけて、印を付けてみて、そこから地域の学習、自分たちの市区町村の学習に入っていくのが、スムーズだと思います。

小池先生 私の学校のある小金井市が載っている地図帳のページ(帝国書院『楽しく学ぶ 小学生の地図帳』p.72)を開いて、今のお話を聞いていたんですけれど、1年生で遠足に行く小金井公園の絵がありました。3年生の子どもたちは「あ、あの公園だ!」とパッと気づくでしょう。こういう子ども目線でつながっていくような**情報や仕掛け、偶発性**ともいえるきっかけがうまくデザインされているのが地図帳なんですね。

村井先生 なるほど、お話に共通するのは地図帳には、**子どもたちの興味をそるおもしろさ**、別の言い方をすれば偶発性があるということですね。だから、いったん

子どもたちが手にしたら、先生はしばらくゆだねてい
と。教科書には自分たちの地元のことはないかもしれ
ないけれど、地図帳なら自分たちの町や市から都道府
県へと、**子どもたちの視野がどんどん広がっていく。**

内川先生 地図帳を見ていると、「自分の県は何が特徴
なんだろう?」とか「ほかはどうなんだろう?」と知りた
い欲求がたくさん出てくる。県どうして見比べて、統計
も1位であってほしいという思いが出てきたりする。そ
んな風に自分で見方を考え、使っていくようになるとい
うことはありますね。それから、旅行をしたり、遠くのお
じいちゃんおばあちゃんを訪ねたりすることがあると
思います。そんなときに「どこを通っていくのかな?」
と自分で地図をたどってみることもあるかもしれない。
地図帳を使ううちにだんだん点から面へとつながって
いき、そして自然に、日本のことに詳しくなっていくとい
う効果はあると思います。

秋山先生 だんだん地図帳を旅行に持っていき子が増
えていくんですね。行った場所に印を付けて見せてく
れたり、地図帳を使って発表する子も出てきます。「夏
休みの旅行に持っていきとおもしろいかもね?」と言
ってみるだけでも、「地図帳を使ってみよう」「発表に使う
こともできるんだ!」といった気づきにつながることに
あります。地図帳にときめく機会^は、4年間を通せば何
回かはあるはずなので、そこを先生たちがうまく見取
つてあげることが、子どもたちを地図帳に親しませるコ

地図帳は

1人1台端末と同様に、
毎日使うツールなんです!

by 小池 翔太先生



じゃないかなと思います。

小池先生 いいですね。ときめくような感じは確かにあ
ると思います。それをうまく仕掛けるのが大事ですよ。
私はICT教育の立場から、1人1台端末を日常的に活用
する研究に力を入れていますが、端末を先生の指示が
なくても子どもたちがパッと使う、そのための仕掛けが
大事だと考えています。**たぶん地図帳も1人1台端末と
同じようなツールなのではないでしょうか。**旅行が地図
帳に触れるきっかけとなるように、子どもたちどうしの
対話の中で「あ、そういえば!？」と、偶発性が現れるこ
とがあります。そういうときに、使えるツールとしてパッ
と差し出してあげる機会はたくさんあるように思います。

デジタル化された地図帳の メリット



村井先生 デジタル化された地図帳には、3年生以上の
学びの中でどのようなメリットがあるとお考えですか。

秋山先生 紙の地図帳では、紙面にすべての情報が盛
り込まれていたわけですが、デジタル地図帳には、その
中から、例えば絵だけ出したり標高だけ出したりなど、
自分が見たい情報だけを表示させる**レイヤー切り替え**
→p.6があります。チェックを付けると、その部分だけ
表示されるというもので、**子どもたちにとっていろいろ
なものが見やすくなり、そのつながりを発見しやすくな
りました。**

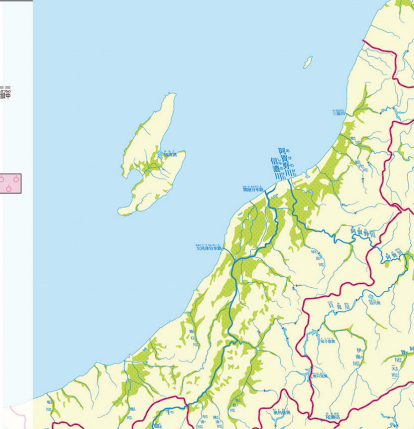
小池先生 子どもたちは、そのレイヤー切り替えの連
打→p.7が大好きなんです。例えば、自動車工業の学習
のとき、愛知県に自動車の工場がマークされていますよ
ね。それに対して「自動車はどうやって工場から出荷さ
れるの?」といったとき、道路を連打するんですよ。す
ると、道路が消える。いらぬ情報を消して、また出し
て消してとやるうちに、なんとなく「あ、この工場の配
置とこの道路には、何か関係があるんじゃないか?」と
見えてくる。昔のフラッシュ教材みたいな感じですよ。
それがデジタル地図帳であれば、子どもたちが**自分で
情報を取捨選択した瞬間、インタラクティブに表示、非
表示**となる。これはやはり紙にはないデジタルのすごく
いいところだと思います。



**レイヤー切り替えで
地図に描かれた
もののつながりが
発見しやすくなるんです！**

by 秋山 貴俊先生

- 自然
- 高さ 河川
- 交通
 - 高速道路
 - 新幹線
 - 鉄道 (JR+私鉄)
 - 空港・港 小島
- 農林水産業
 - 田 畑 果樹園
 - 農林水産物
- 工業
- 歴史・文化
 - 歴史 伝統工芸品
- 都市
 - 都道府県名+県庁所在地
 - その他の市町村 市街地
- 緯線・経線
- 全て表示



デジタル地図帳のレイヤー機能を使えば「田」と「河川」を交互に表示させることで、米の生産地と河川との関係が見えやすくなる。

内川先生 デジタル地図帳には、アップとルーズ（拡大・縮小）という機能もあります。ここを見せたいというとき、子どもたちに「拡大して詳しく見てみよう」とできるのは、すごく大きいですね。

小池先生 「都道府県映像クイズ」というコンテンツがあります。動画も入っていて、動画に慣れている今の子どもたちにはすごく分かりやすい。動画を見せて「これは一体なんでしょう？」といった問いかけから「それでは正解をみんなで…せえの！」といった形でやると、子どもたちがすごくノってくるんです。デジタル地図帳の機能に、最初はまごつく子もいるので、こういうクイズで楽しみながら触れる機会をつくるのは、いい導入になるのではという気がします。

内川先生 最近、子どもたちがまとめる資料に、地図帳の画像が貼られるようになってきました。今まで新聞記事などを基に言葉だけでまとめていましたが、地図も使って説明しようという気持ちが出てきた。これは、**デジタル地図帳は子どもたちにとって扱いやすく、資料としてすぐ使える**ようになったということで、それもデジタル化の大きなメリットであると思います。

小池先生 最近、1人1台端末が日常的になり、学習支援システム (Microsoft Teams) に自分の見つけたことをアップして「いいね！」を付け合ったり、普段、手を挙げて発表することが苦手な子も、そこにコメントしたりする。お互いにいろいろ書き込みをしたり、「これ、ちょっと違うんじゃない？」と指摘したりすることで、**協働的に学びを深める**ことができるのも、デジタルならではのよさですね。

デジタル地図帳で さらに魅力的な学習を



村井先生 デジタル地図帳ならではの魅力的な機能や仕掛けなどはほかにもありますか。

秋山先生 実は、私の夢がついにかないまして、授業で行う子どもたちへのアンケートを集約して地図化してくれる「まっぴん」→p.10、12というツールが実装されています。例えば、私は5年生の食料生産の単元で、いつも「何産のお米を食べていますか？」と聞いて、その結果を白地図にまとめさせていたんですが、手作業で大変だったり、うまく視覚化するのが難しかったりしていました。そこで帝国書院にデジタル地図帳を使ってツール化できないかと相談したところ、このたび実現したというわけです。これを使って、例えば、夏休みに旅行に行きたいところのアンケートを取ると、**結果がリアルタイムで視覚的に地図に表示されます**。それも都道府県だけではなく、市区町村まで見える。そこに、**画像やコメント**なども入れられるので、子どもたちは地図を使った学習がかなりしやすくなり、学習したことを集約しやすくなったということがあります。ぜひ多くの先生に使っていただいて「この単元でこういうアンケートを取ると、子どもたちが視覚的に学びやすくなるよ」ということがあれば、みんなでシェアできればいいなと思っています。

村井先生 それはお聞きするだけでも、子どもたちが使いたくなるような、**主体的な学びがすぐに実現**できそうな魅力的な機能ですね。

内川先生 紙の地図帳にもある「地図マスターへの道」のデジタル版を試してみたんですが、これは、**デジタル化していちばんよかった**と言いたくなるようなおもしろ



デジタル版「地図マスターへの道」なら 子どもたちの学習履歴から 評価に役立つことも可能

by 内川 健先生



さがあります。実際に子どもたちは、RPGのようにアイテムを集めたり、レベルアップしていったりする、いわば**ゲーム感覚**で地図の問題を解いていける楽しさがあると書いていました。子どもたちは紙の「地図マスターへの道」を何度もやっているんですけど、デジタル版になったら、改めてすごく楽しんでやるんですね。紙だと正解は巻末のページで確認するんですが、デジタル版だとすぐに正解が分かるので、子どもたちにとってはすごくラクになった。勉強というより遊び感覚なのですが、**空き時間や放課後にどんどん自分で進んでいく**。自分たちで楽しんで学んでいく。そのきっかけにデジタル版「地図マスターへの道」はなるんだと思います。そして、最終的には地理の技能や活用力が身につけていきますので、ぜひ皆さんに使っていただきたいと思います。

村井先生 地図を使って学習したことが**自動判定され、記録**されていく。それを先生が見れば、**地図帳を使ってどれだけの技能が身についたかという評価**もできる。

内川先生 そうなんです。学習履歴が残るので、どこでどうつまづいたかもはっきり分かります。先生たちも、誰がどれぐらいまで進んでいるか、**個別最適な学び**という意味においても、機能はすごく充実していますね。

学校現場で地図帳が もっと活用されるには



村井先生 ここまでお聞きして、地図帳を使うことで学習が楽しくなり、またデジタルの地図帳だとさらに魅力的で、先生も教えやすく、評価もしやすくなるということをお話いただきました。しかし学校現場では、なかなか地図帳が活用されないという状況もあるようです。

その要因は何だと思われますか。

内川先生 一つには、社会科の教科書や資料集が非常に充実した内容だということもあります。実は、地図帳を使わなくても、事足りるといえば事足りてしまうことが多い。ただ、教科書とか資料集には答えが載っているんですよね。教育の中で子どもたちに、**答えを探させ、考えさせていくことが重要**だと考えると、やはりぜひ地図帳を使ってほしいと思います。例えば、製油所や製鉄所が、なぜ海沿いにあるのかを考えさせるとき、地図帳を開いて「製油所や製鉄所はどこにあるんだろう？」とまず探させて、「あ、海沿いにあるんだ」と気づいたときに、子どもたちが「**なんでだろう？**」と言ったのなら、それはもう、**深く考えていく授業**になっているんですよね。その手間をかけるということがすごく大事なのではないかと思っています。

秋山先生 そうですね。教科書は、見開きに1時間ぐらいの授業でやるべきことが載っていて、そこには答えもある。そうなると、先生たちも、これをやればいいんだという意識になっていく。本来であれば、**学習問題をみんな立てて、それに向けて解決**をしていくというのが社会科の大切なところなんですけど、教科書の中にとどまるような学習に終始することになります。授業の中で、地図帳や資料集を駆使して、答えを導き出すためのヒントをもらったり、答えらしきものを探しに行く、そんな工夫が必要なのではないかと感じています。

小池先生 ICTの分野でも、なぜ端末が使われないのが問題となります。ツールであることは、端末も地図帳も同じだと思うんですよね。学習者が使いたい時に使えるような工夫やクラスの雰囲気づくりができればいいと思うんですが、それは、なかなか難しいところがあります。

社会の中で生きて働く力を身につけるために



村井先生 最初のほうで内川先生がおっしゃっていましたが、小学校3年生は、高校に至るまで社会科を学習していく、その始まりなんだと。そして、高校3年生までに身につけさせたい、**生きて働く力を本当に育むことができるのは地図帳**なんじゃないかなと思いました。子どもたちが小学3年生から地図帳を活用し、段階に見合った力をつけさせていくにはどうしたらいいか、最後に全国の先生に向けて助言をいただけませんか。

内川先生 私たちは、子どもたちの空間認識を過大評価しているのかもしれない。実際に、都道府県の名前を覚えた子どもでも、その県がどこにあるかは把握できていないことがあります。やはり教師側が、子どもの発達段階や能力に気を配って、**地図帳を使って空間的なつながりを見せていくことが大事**なんだと感じています。福岡県の隣に佐賀県がある、大分県もあるという風に、広い空間の中で日本や世界を見ていくのは、子どもたちの**世界図を広げていく一つの力**になると思います。

秋山先生 3年生は、まず地図帳に興味・関心を持つということでもいいと思います。4年生になると、自分の地域といった単元が出てくる。いちばん地図帳が使いやすいのは5年生。特におすすめしたいのは、いちばん先生たちがやりづらいかもしれない**緯度・経度**のところ。じゃあ「同じ緯度や経度のところはどこだろう？」と見るには、やはり世界地図があることで関心が深まると思います。そして6年生になると、**歴史**ですね。昔の地名



先生自身が地図に関心をもってれば、授業以外の日常会話の中でも子どもたちに地図へと目を向けさせることができる。

が載っているページもあるので、そういうところを開きながらやるのはいかがでしょうか。

小池先生 私は他者を理解するとき、**地形的な理解などの社会事象の見方・考え方の育成が必要**で、その育成には**地図帳を使うことは絶対必要**だと考えています。さらに言えば、私たちは教育課程に則って授業をしなければならぬので、例えば、**次の学習指導要領に「地図帳の活用」が「知識・技能」のところにバンと明記される**といったことになれば、**教師が地図帳を使って子どもたちが学習していく流れ**になっていくと思います。ただ、学習指導要領への明記などはすぐには難しいので、例えば、係活動の応用としてクラスに必ずいる地図や社会科が大好きだという子に、「**地図係**」になってもらい、何かあれば地図帳で調べてもらう。**子どもたちと地図帳が係活動で「輝く瞬間」があれば、地図帳の活用が日常化し、深まっていくような手立てになるのではない**かと思います。

村井先生 ありがとうございます。これをお読みになって、ご自身で地図帳を使ってみようと思われた方は、たくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。子どもたちは、**地図帳を活用した楽しい授業、魅力的な授業を待ち望んでいます**から、ぜひ使ってみてください。

